

shimin-hatsu@tokyo-np.co.jp

カンガエル  
ツナガル  
トモニ

## 美酒復活で地域交流

トモニ 「花の香楽会」主宰 鷺山恭彦さん(73)

k-sugi@mail.wbs.ne.jp



わしやま・やすひこ 19 大学教授を経て同会長。さまざまなイベントに掛川市に身をこめ、イベントでは43年、静岡県掛川市生まれ。東京大学文学部卒業、現る古い民家の自宅を提供す。会員同士の交流と議論を重視。代トイツ文学専攻。東京学芸。具体的な議論によって生

## 花

の香楽会は静岡県掛川市の幻の美酒「花の香」を復活して地域おこしにつなげようと二〇〇六年に活動を開始した市民プロジェクトです。会員が毎年、田植えや除草作業、稲刈りに参画し、酒蔵を見学して酒の仕込みを行い、出来たての新酒は「陶酔の宴」を開いて楽しみます。

「花の香」は昔造り酒屋だったわが家で一八八〇(明治十三年)まで造っていたものです。当時「かぐわしく、遠州一円に名をはせた」と言われました。二〇〇六年に「開運」の銘柄で知られる土井酒造場の土井清悞社長(当時)と話すうちに「開運花の香」で復活することになり、それをサポートしようと「花の香楽会」がスタートしました。あつという間に二百人も会員が集まり、その年の田植えに次々集まった皆さん

は自己紹介し合いながら田植えを楽しみ、パーベキューに舌鼓を打ち、新しい交流の場ができました。

会員は郵便局、農協、学校、企業、自営業と各職種にわたり、学生ら若者も来ています。ある意味、専門性を持った多様なメンバーによる地域交流の場でしょうか。戦後民主主義を謳歌し、市民社会を豊かに背負ってきた団塊の世代の人たちは、民主的なセンスで大車輪となって楽会を支えてくれています。

月ごからの新酒の季節には、土井酒造場を訪問し

「花の香」の仕込みを行います。前夜祭として「酔い宵談義」という催しをやります。わが家に泊まっていた夜の夜なべ談義です。「出会い、触れ合い、ホットなニュース」をモットーに、地元のこと、家庭の悩み、政治問題、一番切実に思っ

ている問題について語り合います。

今月二日に酒造好適米「誉富士」の田んぼに会員約八十人が参集して、稲刈りをしました。その後は恒例の交流会。摘み草テンプラや黒ハパンなど地産地消の料理を味わいました。雅楽ユニットやギターユニットによる演奏も人気でした。

自由であること、リベラルということは大切ですね。リベラルはフリー・フロムということ、権力や既成事実から自由になることです。正しいという字は「一」と「止」と書きます。一度立ち止まって考えること、自由な批判精神と合わさった正しさは魅力でしょう。

## 私

たちが享受した戦後の民主主義を大切にしたいですね。国家はほっておくと口クなことをしない。社会と国家は分離していい。国家と社会が一致した戦前は悲惨なことになる。社会の側から国家を規制するのが憲法なのです。国家は単なる利害調整機関にすぎません。私たちの活動もそう。社会貢献ができればと思います。

文化水準とは知識や情報がたくさんあるから高いわけではありませぬ。そうしたもの総合して生活スタイルになっていること、これが文化であり、文化水準です。だから私たちは新しい知識や情報を生活の場で捉え直し、反すうして自分の知恵に変え、生活内容の枠を広げていくことが大切です。楽会は多様な人々による交流と語り合いによって、そうした生き方を目指しています。

## 遠

州一の美酒」と称された日本酒を復活するために結成された「花の香楽会」。田植えや稲刈りなどさまざまなイベントを通じ、地域や世界についての問題意識の共有を図る。主宰者の鷺山恭彦・元東京学芸大学学長(七三)＝静岡県掛川市上土方＝は「酒造りを軸に、自然を循環する新しい場、地域発展を構想する場」と説明。地元だけでなく、東京からの参加者も多く、異業種・異世代交流の場として進化し続けている。(土田修)



「花の香」に使う酒米の稲刈りをする参加者。最後列右から2人目が土井酒造場の土井清悞会長＝静岡県掛川市上土方で